

スポーツジャーナリズムとは何か

A Study of Sports Journalism

1K03B047-9 氏名 加藤 年紀

指導教員 主査 宮内孝知 先生 副査 石井昌幸 先生

【序章】研究の動機と方法

ゼミの活動を通して、スポーツジャーナリズムというものに興味を抱くようになった。しかし、私は「スポーツジャーナリズム」という言葉を聞いたときに、実は曖昧なニュアンスのまま理解をしていた。度々話題にあがるスポーツ報道の無批判性とは現在も言えるのだろうか、さらに曖昧な「スポーツジャーナリズム」という言葉に違和感を持った。その点について留意し、スポーツジャーナリズムとはどのようなものであるかを検証しようと試みた。

本研究は現代のスポーツ報道やスポーツにまつわる新聞・雑誌等の出版物から行った。また、この問題についてはジャーナリズムという言葉の重要性を論じること無しに、考えることはできないと感じ、ジャーナリズムの先行研究及び、スポーツに関する先行研究を元に行った。

【第1章】スポーツとジャーナリズム

スポーツジャーナリズムという言葉を知解するには、まずスポーツとジャーナリズムそれぞれの用語について考える必要があると思い、それぞれの用語の歴史や定義をこれまでの先行研究を元にまとめた。スポーツもジャーナリズムも大きく権力に振り回された過去を持つことがわかる。個別に見てみるとスポーツは「余暇における余剰身体のエネ르기消費」として定義されている。それに対してジャーナリズムは報道機能、批評機能、娯楽機能等の機能を持ち、原則として「国民のことを第一に考えるもの」とされている。しかしながら、日本ではメディアをジャーナリズムの同義として扱われていることもわかる。

【第2章】スポーツジャーナリズムとは何か

第2章ではスポーツとジャーナリズムそれぞれの言葉の背景を理解した上で、先行研究を元にスポーツジャーナリズムに対する理解を深めていく。ここでは、ジャーナリズムと同じ原則や機能をスポーツジャーナリズムが持つことがわかり、その歴史にも触れている。そして、ジャーナリストという用語の使われ方を考察することにより、国内におけるジャーナリズムという用語の脆弱性を示した上で、ジャーナリズムということばの曖昧さがスポーツジャーナリズムということばにも曖昧さを与えている要因であると論じた。

【第3章】スポーツイベントに見る現在のスポーツ報道

第3章では、スポーツ報道における無批評性を批判される中、「プロ野球日本シリーズ」と「バレーボール世界選手権 2006・女子」の2つのイベントに対するテレビ、新聞、雑誌による報道を分析した。その結果、日本シリーズには多くの時間や紙面が割かれ批評も行われていた。しかし、バレーボール世界選手権には批評がほとんど見られなかった。さらに、それ以前の問題としてバレーボールに関しては報道量が圧倒的に少なく、特に新聞では顕著で紙面面積の差は100:5となった。また、その様な差が出てしまうのはメディアの構造的な問題が大きく関わっているのではないかと結論付けた。さらに、スポーツジャーナリストがスポーツ報道に関わる事が少なかったという事実も顕になった。

【終章】結論

終章ではスポーツジャーナリストがメディア露出の場所を奪われていく現状において、彼らが批評をする難しさについて考察した。特にプレイ批評については元選手によるものの方が優れているのではないかと思う一方で、現在活躍しているスポーツジャーナリスト二宮清純氏に着目した。彼は最近話題になった「村上ファンドによる阪神電鉄株の取得」や「プロ野球の経営問題」というスポーツの知識だけでは語ることはできない領域において、他の専門家の意見を踏まえつつ論じている。スポーツが拡大し多くの領域に関わる様になった今、スポーツジャーナリストに必要なのは、多くの専門領域にまたがるスポーツと他の分野の知識をうまく統合し、ジャーナリズムを展開していくことであると論じた。

また、スポーツジャーナリズムと他のジャーナリズムにおける違いは何かと考え、スポーツジャーナリズムの対象であるスポーツというコンテンツが娯楽的な要素を多分に含んでおり、スポーツを批判する事が、その娯楽性を失う可能性を秘める難しさがあると結論付けた。

最後に、本論文を通して曖昧だったスポーツジャーナリズムという言葉、「第一に市民の幸福を考え、スポーツという対象に報道機能、娯楽機能、評論機能の全てを持って報道をしていくこと」と再定義した。